

# 日本基督教史と神戸女学院史の「九年」

## ——学院創立一二五周年を前に思うこと——

いよいよ二〇世紀も大詰め。余すところ数か月で西暦紀元二〇〇〇年を迎えることになりましたが、その年、われらが神戸女学院は創立一二五周年を迎えます。従って今年は、この実に区切りの良い年を一年後に控えて、学院の来し方行く末をしみじみ思いめぐらすのにふさわしい好機と言えましょう。

ところで、年表を繰っていて、他愛ない、けれども何とはなしに心をそる標しるしに気づきました。ラウンドナンバーに一つ足りない、その末尾に九のつく年、これが神戸女学院史にしばしば画期的な意味を附与していることです。もつともこれは神戸女学院史にとどまりません。それは実に日本のキリスト教史上においても注目に値する出来事をいくつも見せてくれました。

まず、キリスト教のそもそもの伝来です。今を去ること四五〇年の一五四九年八月十五日、イエズス会士フランシスコ ハビエル (San Francisco Xavier) が神のみ言葉を携えて鹿児島に上陸しました。(そこでカトリック教会は今年、この四五〇年目の記念の祭りに沸いています。)

もつともこの志業が間もなく禁教の非運に際会したことはご承知のとおりで、踏み絵実施の始めが一六二九年、そして一六三九年にはこの国の鎖国体制が完成して、以後、二〇〇年に余るか、くれ切支丹の時代が続きました。

これを打ち破るきっかけとなったのが、十八世紀の半ばに来航した、いわゆる「ペリーの黒船」というのも、ご承知のとおりですが、こうして開国に踏みきった日本に改めてやって来たキリスト教の宣教師たちの中で、聖フランシスコの時代にはまだ欧州に生まれて間もなかったプロテスタント教団からの嚆矢は、ローマ字の綴り法にその名を残すヘボン博士 (Rev. James Hepburn)

とその一党。一八五九年の渡来でした。

それからちょうど一〇年ののち、アメリカに大陸横断鉄道が開通したことに勢いを得て、東部ボストンに本部を持つ海外伝道団体が日本伝道開始を決定したのが一八六九年。これこそ神戸女学院開学の端緒です。この学校はこの伝道団体 American Board of Commissioners for Foreign Missions の宣教師たちによつて建てられ、守り継がれ、紛うかたなき生粋のミッション スクールとして、今次大戦直前までの六五年の道程を踏破してきたのでした。戦争中は、これら宣教師方の意を体して学院を守る邦人牧師を院長として与えられ、その歩みを新生日本、今のわたくしたちの時代につなぐことになりました。

戦後の五〇年にはそれ以前の学院が経験したような、いわば荒れ地を開拓するような、ドラマティックな事件は見当たりません。すでによき苗床が築かれていたためです。一九四八年に国公立の大学に先立つて新制大学の設置を認可された私立大学一二校のうちに加えられたのも、ミッション スクール時代の人脈の縁に由るところ大であつたこと、また、創立母体であつた伝道会から派生した在米の支援団体の永年にわたるコンスタントな援助と、歴代の宣教師教員の薫陶を生涯の宝とした同窓生たちの支援があつたればこそその幸いであつたこと(しかもこの幸いは今日にいたるまで、この学院の往く道のともしびとなり支えとなつてきました。)を認めないわけにはゆきません。

もつとも、「時代の風」「時勢の波」はとどまるところを知らず、道が平坦になればなつたで、また様々な障碍が以前とは異なる形で生来していますから、わたくしたちもまた先人と同様「腰に帯をしめ往く途に備えててきばきして」いなければならず、何年か毎の節目の時はその決心を新たにするための恵みの時と言えようかと思ひます。

が、そうしてふりかえつてみた一二四年、その中で目についた「末尾に九のつく年」のお話をしていたのでした。

この学校の創立者の来日も学校のはじめも(残念ながら)「九のつく年」ではありません。但し、一八七三年に来日した二人の婦人宣教師ミス タルカット (Miss Eliza Talcott) とミス タッドレー (Miss Julia Elizabeth Dudley) のもとで一八七五年に神戸山下通に開校した「女学校」が、その邦名を「神戸英和女学校」と定めたのは、多分、一八七九年。文部省の「教學聖旨」の出た頃のことでした。(因みにこの年は、最後のミッションナリ―院長ミス デフォレスト (Miss Charlotte Burgis DeForest) のお

生まれになった年でもあります。)

学校はこの頃から本物の High School を目指し、更には College を備えようと、教育課程の整備、教育施設の拡充を計ります。その根本目標はあくまでもキリスト教に基づく女子教育。しかし当時の日本には、そして殊に一八九〇年代の世相には、封建的儒教道徳、排外思想が横溢しており、アメリカの女性クリスチャンの経営する学校では一般受けしないということを痛切に実感させられながら、しかしそういう状況であるからこそなおのこと、この学校は自分たちの手で守らなければならない、そのためには学校自体の内容を一層充実させることで独自の地歩を守ってゆこうというのが、当時の宣教師教員の一致した考えでありました。一八九四年春の学校名の改称は、そういう壮烈な信念の最も華々しい表現と感じられます。すでに女子のための最高課程を備えた学校となったことを Kobe College という英文名をとることで内外に公示することにしたものです。邦文名は神戸女学院。通常の女学校 (High School) の課程の上に三年の高等教育 (College) の課程を整えた学校の総称がこれで、カレッジの課程は日本語では高等科と呼ばれていますが、当時のアメリカの女子大学 (カレッジ) をモデルにした Liberal Arts Education の実践の場でありました。この日のために整えられた新校舎二棟、理化学館と音楽館の献堂式の模様が同窓会誌『めぐみ』に掲載されて興をそそります。学院歌の出来たのもこの時でした。

そしてまた、「末尾に九のつく年」を迎えて一八九九年。多事です。この数年健康を害していたミス ブラウン (Miss Emily Maria Brown) 第三代校長・院長学校が神戸英和女学校から神戸女学院とかわったのはこの方の時でしたから。の引退帰米に伴い、長らくよき補佐役をおとめであったミス ソール (Miss Susan Annette Searle) に院長職が引きつがれました。(ちょうど百年後の今年、中高部長の交替に際会して、昔のことに改めて心を馳せる機会を与えられました。)

この年のもう一つの重大事は、文部省訓令第一二号の公布です。政府公認の学校ではいかなる宗教行事も教育もやってはいけないというこの通達を前に、ミッション スクールはどれほど悩んだことだったでしょう。当然各学校のお家の事情によってその対処の仕方は様々ですが、「キリストの大義」Cause of Christ によって立った神戸女学院は、節をまげませんでした。あえて、政府の保護のない各種学校の地位に甘んじて、キリスト教に根ざした女子教育を守ること、世間体や学校の評判はその内容の充実に

よって守るべく努めることを決意します。

ところがここに、目を見はるような事態が持ち上がりました。文部省訓令とは別に私立学校令というものが出て、神戸女学院は、第四代院長に就任したばかりのミス ソールと共に、兵庫県知事から認可されることになったのです。「涙と共に種まく人は喜びをもつて苺り取る」という詩篇の一節を思わせる慶事ではありませんか。

次の、一九〇九年にもまた二つのことがあります。まず五月二十二日、ミス ソールの発案で学校の創立者ミス タルカットの誕生日が催され、爾来これが神戸女学院の年中行事になったこと。ミス タルカットは一九一一年に天に召されましたから、誕生祝の行事は三回だけのはずでしたが、その翌年からこの祝会は墓前礼拝となつて今に続きます。それも、御命日にはなく相も変わらずお誕生日に。これはまるでクリスマススのようです。

それから、十月には、専門学校令によつて四年制の専門部の設立が認可されました。学校が Kobe College を名乗つてから一五年。当時、専門学校というのは私学にとつては最高学府の呼称でしたから、神戸女学院は名実共に、女子高等教育の旗頭の中に数えられることになったわけですが、それから更に一〇年後の一九一九年、この専門部は大学部と改称されるに至ります。

もつともこの時の変更は学校名だけの範囲にとどまるものでした。政府によつて適用される教育令はあくまでも専門学校令(男子のためにはこの同じ年に大学令が出て、その最高学府を保証したのですが、これは女子のためには及びませんでした)であり、また神戸女学院自体においてその勉学の内実は、すでに二七年かけて積み上げてきたものに大変革を加えなければならないというものではなかったからです。

もつとも時の院長ミス デフォレストはこの時「大学部について」というコメントを出し、いずれ本物の大学令が女子の学校にも適用される日に備えて、学校の益々の充実を心がけたいとおっしゃいました。目標とすべきは、教員の充実、寄宿舎の整備、基本金の貯え、そして全ての根底となるキリスト教精神の増進。そのために関係者一同の切なる「祈り」がもとめられました。

翌年、休暇帰米の途についたデフォレスト院長のアピールに<sup>かね</sup>応えて、予てより神戸女学院の学校事業の強力な後援であつた米国中部婦人伝道会 (Woman's Board of Missions of the Interior) や、その前会長のエミリー W・スミス夫人 (Mrs. Emily

White Smith)らの肝煎りで、シカゴに Kobe College Corporation という財団法人が出来、これより神戸女学院は、基本金造りのため、また岡田山キャンパスに移転の際の資金繰りのため、実に寛大な援助を与えられることになりました。KCCの略称で知られるこの組織は来年創立八〇周年を迎え、現役のメンバーには初代の理事諸氏の知己はもういないようです。けれどもその志は連綿として受けつがれ、学院は、今も事あるごとに、祈りと様々な形の支援を頂いています。

デフォレスト先生はかつて、「女学院は、アメリカのシカゴ中央婦人会(中部婦人伝道会のことです)の、自分達がキリスト教に依って受けた恵みを日本婦人達にも分かちたいと云う切なる望みから生まれたものであります」とおっしゃいましたが、こういうことの中に、この学院の永久標語「愛神愛隣」の実践を見ることが出来るでしょう。「神を愛し人を愛することをモットーとした学院が、神に愛され人に愛されて歩んだこの長い途のり」というのが最近のわたくしの常套句になりました。学院史を繙くたびに、たくさんの方々の宣教師方と、その人々を送り出し支援した、またたくさんの方々の心ばえが、この学校のはじめの頃から愛唱され続けた讃美歌、I love to tell the Story...の歌詞そのままの熱い思いとして立ちあらわれて来るからです。(そう言えば、この讃美歌が出来たのも、たしか一八六九年のことでした。)

一九二九年はキャンパスの移転計画の煮つまつた年と言って良いでしょう。岡田山の地所を購入するのは翌年に入ってからですが、新校舎の設計をヴォーリズ設計事務所に依頼し総建築委員会を設置したこと、KCCが建築資金七〇万ドルの募金を完了したことが記録に残っています。

この同じ年、第四代院長をつとめ一九一五年からは名誉院長として学生卒業生の指導に尽力なさったミス ソールの引退帰米とすることがありました。「祈りの人」の異名を冠せられた先生の名は、岡田山キャンパスの要<sup>かゝ</sup>とも言える美しい小さな礼拝堂に残されて今日に及びますが、先生を直接に存じ上げる人はもう殆どありません。

そして、一九三九年もまた、ミッシヨナリー院長の帰米の年となりました。第二次世界大戦が勃発したこの年、日本もまた軍国主義たけなわの時とあって、心労に倒れて休養のための帰米を余儀なくされたデフォレスト院長。その正式の引退は一九四〇年のこととなりますが、そして終戦後は早々に帰院して、学院の新制大学として発足するのを助け、神戸女学院の七十五年史を執筆し

……と、先生ご自身と神戸女学院との縁はまだまだ続きましたが、学校そのものの歴史は、先生の院長退任をもって六五年に及ぶ生粋のミッション スクールの頁を閉じ、邦人院長と理事会による一般キリスト教学校の歩みを綴ることになりました。

この年は、高等女学部にも交替劇がありました。川崎市藏高女部長の病歿により、二宮源兵先生がその後任に選任され、デフォレスト先生の後を承けた畠中 博先生と共に、戦時下の難場を凌ぐ責めを果たされます。

戦争が終わって、学校制度も一新した時、神戸女学院は新制大学の設置を一九四九年にするつもりであったようですが、これは、かつて女学院で教鞭をとり、この時にはGHQの女子教育担当官であったルル ホームス女史 (Ms. Lulu Holmes) の助言によって一年早まり、一九四九年を画するものは、大学音楽科の開設です。

一九五九年と一九六九年の世相は、日米安全保障条約が因の学園紛争を経験しています。神戸女学院の場合キャンパスの破壊という事態には立ち至りませんが、学生生徒の動揺は少なからず、殊に一九七〇年前後には自治会の機能停止、学生生徒の諸活動の停滞と、深刻な様相を呈しました。一九六九年に学長に御就任の溝口靖夫先生が八年后『神戸女学院百年史 各論』に「新しい時代の認識の上に立つて、学院の当局・スタッフ・学生生徒の間、また学校と同窓会とコーベ・カレッジ・コーポレーションの三者の間に、人格と人格の愛による繋がりのあるところ、神戸女学院の新しい展望が見い出されるのであらう。」とお書きになったのを併せて思い起こし、胸に迫るものを感じるのは、ひとりよがりでしょうか……。

神戸の「女学校」は大きくなりました。一九七九年に百周年記念建築としてイライザ・タルカット記念館が建てられてからでも、もう二〇年。今は大学院の後期課程まで備えて「なぜこれがカレッジ？」と言う人もあるようです。（このことはまた別の機会にお話ししましょう。）けれどもこれが、一朝一夕で成ったものではないことを識り、その長寿の秘密を悟るようにと、今、わたしたちは招かれているのではないでしょうか、世紀の変わり目に非常に区切りの良い記念日を迎えるという特権にかけて……。

（若山 晴子）